

## 県外視察研修 福井県北部の文化財を訪ねて

平成6年11月5日火曜日、やっと秋らしくなってきた曇天の朝、高鷲振興事務所前の駐車場に参加者が三々五々集まってきて、高鷲小学校の生徒達も登校する時刻であった為、子ども達と『おはよう、いってらしゃい』と挨拶を交わしながら、参加者10人が揃ったところで8時に振興事務所のマイクロバスは出発した。車中は、運転手が渡辺氏、進行と幹事が山下副会長が勤め、西脇会長の挨拶ではじまり、馬淵会員が作成した研修場所のレジメの説明後、各自が自己紹介をしながら和やかに車は、白鳥・油坂峠を越え、油坂峠や九頭竜湖付近は標高が高いので、紅葉は今が盛んで大変美しい景観であった。その後、和泉村の九頭竜道の駅でトイレ休憩した。道の駅では、いきなり恐竜の模型に出迎えられ、暫く恐竜の動きを見いった。九頭竜からは中部縦貫道に入り、あつたいう間に永平寺に着いた。以下、研修場所の簡単な説明と参加者の様子を報告して、高鷲文化財保護協会の『県外研修』が楽しいものだと会員に知ってもらうために報告書を作成した。

### 永平寺

開山は道元で永平寺は、福井県吉田郡永平寺町にあり、曹洞宗の總持寺と並んで、日本における曹洞宗の中心寺院（大本山）である。山号を吉祥山と称し、本尊は釈迦如来・弥勒仏・阿弥陀如来の三世仏である。寺紋は久我山竜胆紋（久我竜胆紋・久我竜胆車紋）である。道元は出家して比叡山延暦寺に上った後に宋に渡り、天童山景德寺の如浄に入門し、ひたすら坐禅に打ち込む「只管打坐（しかんたざ）」の禅風を継いで帰国した後、京の建仁寺に住したが、波多野義重の請いにより寛元元年（1243年）、興聖寺を去って、義重の領地のある越前国（福井県）志比庄に向かった。義重は当初、道元を吉峰寺へ招いた。

この寺は白山信仰に関連する天台の寺院で、現在の永平寺より奥まった雪深い山中にあり、道元はここで一冬を過ごし、翌寛元2年（1244年）には吉峰寺よりも里に近い土地に傘松峰大佛寺を建立した。これが永平寺の開創であり、寛元4年（1246年）に山号寺号を吉祥山永平寺と改めている。寺号の由来は中国に初めて仏法が伝来した後漢明帝のときの元号「永平」からであり、意味は「永久の和平」である。

永平寺は、坂と階段が多く足が不自由な老人の参加者には、多少きつかったかもしれないが、途中の法堂前では休憩するベンチがあり会員はここで一休み（写真）、また、ここは曹洞宗の本山であり修行僧とすれ違うときは彼らは合掌して通り過ぎる。無事見学を終え、入り口の所で集合写真を撮った後、土産物店で名物の「越前そば」などをかう会員もいた。



永平寺法堂前で休憩



永平寺入り口の石碑前で記念撮影

の所で集合写真を撮った後、土産物店で名物の「越前そば」などをかう会員もいた。

## 一乗谷朝倉氏遺跡

朝倉氏は、但馬国朝倉庄（兵庫県養父郡）の豪族で、その地に名前が由来している。南北朝時代に越前国守護斯波氏に従って越前に入国し、地頭として一乗谷近隣を支配の拠点としていた。戦国大名の朝倉氏の初代城主の隆景は、1467年の応仁の乱での活躍をきっかけに、1471年に幕府から越前守護に関する要望を認められ、以後、氏景、貞景、孝景、義景と5代にわたって越前を統治した。この間、一乗谷には京の貴族や僧侶など文化人が訪れ、北陸の小京都と呼ばれるほど隆盛を誇った。しかし、天下統一を目指す織田信長と対立し、1573年に朝倉氏は滅び、城下町は焼き払われた。朝倉氏の滅亡後の一乗谷は、急進や一向勢による支配を経て、信長に統治される。信長は一乗谷から約10 km離れた北庄城を北陸支配の拠点とし、柴田勝家に守らせた。その際、一乗谷の寺社や商工業者は北庄城下に移されて一乗町などを形成しました。江戸時代の一乗谷は城戸ノ内村という農村になった。田畑の造成や用水の開削が行われ、一部の遺構は失われたが、大半は地中に保存された。発掘調査は、昭和42年から開始され、昭和46年に国の特別史跡に、平成3年に4庭園が一乗谷朝倉氏庭園として国の特別名勝に指定された。さらに平成19年には出土品の内2343点が重要文化財に指定された。参加者は武家屋敷跡や築地塀が並ぶ通りを散策しながら、重い足を引きずりながら朝倉氏館跡庭園に向かった。途中、館濠があり緋鯉や真鯉が泳いでおり、疲れた心に休息を与えてくれた。

幹事が昼食場所として思っていたレストランが定休日だったので、急遽『水の駅』にある食堂に入り、各自が思い思いのモノを注文して食べた。私は幹事が越前でおすすめと言った『ソースかつうどん』を食した。



武家屋敷塀を歩く参加者



朝倉氏館跡唐門前で記念撮影

## 平泉寺白山神社

平泉寺白山神社は、福井県勝山市平泉寺町平泉寺に鎮座する神社。白山信仰の越前国側の拠点として、仏教僧の泰澄により717年に開山されたと伝えられ、後に比叡山延暦寺（天台宗総本山）の末寺となって栄え、明治時代の神仏分離までは仏教寺院霊応山平泉寺だった。室町時代後半の最盛期には砦や堀を備え、全山石垣に囲まれた要害へと変貌し、東西1.2キロメートル、南北1キロメートルもの範囲に、南谷3600坊、北谷2400坊、48社、36堂、6000坊の院坊を備え、僧兵8000人を抱える巨大な宗教都市を形成した。天文12年（1543年）、長年にわたって加賀馬場・白山比咩神社が持っていた白山山頂の管理権や入山料の徴収などの利権を越前馬場・平泉寺が奪おうとし、これ以降ずっと揉め続けることとなる。戦国時代には越前の国主である朝倉氏と肩を並べるほどの一大勢力となっていた平泉寺は、「日本国一番の法師大名」といわれた。寛保3年（1743年）、いさかいが絶えなかった越前馬場・平泉寺と加賀馬場・白山比咩神社の利権争いがようやく江戸幕府寺社奉行によって、御前峰・大汝峰の山頂は平泉寺、別山山頂は長瀧寺（長瀧白山神社）が管理すると決められ、白山頂上本社の祭祀権を獲得した。明治時代に入ると神仏分離令により寺号を捨て神社として運営されることとなり、寺院関係の建物は解体された。このようにして平泉寺という寺院は廃寺となったが、平泉寺白山神社として神社として越前馬場の面影を残している。神社境内の苔の植生が美しく、さんかしや<sup>は</sup>は足の疲れも忘れ、美しい参道を本殿まで歩いた。



平泉寺白山神社参道を歩く参加者

平泉寺を出るときは夕方で、途中、荒島道の駅ではお土産を買ったりトイレ休憩して、夜のダム湖のほよりは暗かったが渡辺さんの運転がうまく安心して乗っていると、夜の白鳥の町並みの灯りが見え、帰ってきたという実感が湧いてきた。そしてほぼ18時頃に高鷲振興事務所に無事着いた。皆さんお疲れ様でした

参道  
馬場

た。

“のび